奥行日記

大槻玄沢著

洋学文庫
文庫8
A 48

特
418
100

磐水先生随筆

大槻文庫

奥行日記

天明六年五月廿八日自支封之醫貟榮進宗藩且永奉官邸祗役之命時郷里有北堂及妻兒之在故欲挙家移居於東都方官途與治業未暇遠行荏苒至七年之秋

七年九月廿一日黎明離村街僑居携一僕跨馬而発欲遠迎我奥中之家人前夜交友諸子餞別半夜始決去晝間風雨頓霽天色明朗向暁風寒馬上不堪士幹李子送村街之第五橋告別而去渡江都橋経本街至淺草門夜始明過淺草三谷至千樹大橋右望秩父諸山左見筑波峯驛中居人繁夥時是早旦賣諸蔬蔬者尤衆是運轉都

大槻文彦藏

下之物矣過千樹抵草加飲茶亭夾小流皆長堤出千樹
左右田畝平曠多陸種菽粟右見富岳之土半腹此時風益
厲午前至越谷飯茅屋連簷比小邑頗長計凡三里余出
驛遙望見真髮山申時後風稍止至粕壁宿醋漿亭
廿二日蓐食而發離驛夜已明天色快霽五鼓抵幸手出
此驛數十歩有小流其前後田畝盡為荒壙沙漠之地
是去歳襄陵之変所致可嘆又行數歩至栗橋堤漸出中
間三面開豁是昔時所不見也左有大河流是所謂刀禰
水亦邦三大河之一也去年河水泛溢而破壊長堤左右之
灌水木叢〻條民家皆一時滅却計一百有三十間之際也

道亭田園悉荒蕪其限不可見今之開豁為之故也
堪慨嘆又行數十歩而下堤至栗橋驛過関門出渡口
是武野之封疆也渡河而至中田小憩暫時欲到古河自
此道路廣濶左右松樹連綿實王侯之大道也隨行
而日光諸山望至近就中突兀者中禪寺峯也右方白
雲一色無物見特山歸然秀出者筑波峯也行望古河城
樓至其郡邑已午比前後諸邑頗豊謂日光大王之歸
東都經野木間々田黄昏至小山驛宿四角(カトヤ)亭此地也
昔時小山判官所城今尚城址存云慶長間　神祖欲伐
上杉景勝至此地時伏水有変還大駕乃有関原之役云

廿三日寅時後発小山驛行新田之途中筑波雌雄雙峯
映旭日粲然經小金井石橋雀宮至宇都宮此間日光
諸山合抱如繞墻其高者皆山巓頂見雪古常州諸山
連綿宇都宮今京非尹戸田公之封地左通日光直道
奥羽之道路人屋許多去東都以来之一都會也過
松前侯之朝東都離此驛古烏山雛山諸峯在目
睫申後至白沢下馬徒行出驛有河数流所謂絹
川是也日光諸山之下流也有小邑日阿久津香魚此地
之名品云味頗佳黄昏至氏家泊福田屋此驛乙巳之
冬羅祝融氏之災驛中居〻委灰燼今再修未半

廿四日蓐食発行数百歩夜正明寒冷栗烈宜満地秋
霜降高泉花〻四維山嶽那須茅諸山雪降為白色是当
年之初云辰時抵喜連川驛口有小流所謂喜連川有懸
崖曰掛崎入驛小憩是地即喜連川君封地君足利
將軍後裔而門曹□□每歳例以臘月廿五日朝東都
以正月九日皈封地云出驛又有河小山高圃路渉至作山
那須七騎之一福泉君之封地自此経那須荒泉至大田
泉那須泉者名高之大高泉也幅員六十里云野州諸山
至近大田泉驛口左方有岐路到日光山之處也此驛者
即大田泉侯世所封之地民屋頗豊過鍋掛有一河日

中川荻生石之下流而注水戸西海云渡河泊越堀雑子
楼黒羽侯封内云時黄昏也津軽藩士同宿
廿五日平明発攀山阪至芦野小憩七騎之一芦野左近
君世所居云午後至境明神是野奥之封彊所謂白河
関也両国安明神祠茶店鬻次食餅家亭頗潔雅
左方那須會津諸山白雪熒申時泊白川両衣屋是
閣老職中侯都邑人民繁殷一方城府也
廿六日蓐食寅時発平明大霜嚴冷経小田川大田川踏
瀬大和久新田至矢吹右方有岐路棚倉街道也過
久米石笠石須加川小憩経佐〻川日出山小原田申時後

投宿郡山淡海亭地頗聚多楼今日無風快霽會津
二本松諸山雪粲然高力公家臣同宿至羽州之封地之
人也閑談至夜半頗風士也
廿七日朝冷微雪霏〻夜明発経福原日和田高倉至本
宮小憩地頗豊多妓家過杉田至二本松丹羽侯之都邑
驛長六里人民繁殷至二本柳自笹川至此丹羽侯封内
也攀山阪黄昏泊笹第八街藤倉亭此地山中氏所□
也人屋頗多有妓家
廿八日早明発至若宮清水町此間山阪多西方見虹左方
米澤福嶋諸山雪皚〻就中諸峯連綿中空兀者小

芙蓉也風色甚佳至福嶌時四鼓坂倉公封地人屋頗繁
夥出繭絹及油紙等所製煙包雨衣亦名品此地屬信夫郡距此僅里
許有一大平石其石面有草紋俗稱止諸蒲者也古来國
風所詠是也土人摹絹或紙鬻於風士騷客甚愛玩之出
驛有小流自此北地至貝田縣官所近見屬我藩四置有
司数人治之收貢歳入物奉官瀨上桒折藤田貝田諸驛
也皆屬伊達郡左方連山中殊嶺焚者半田峯也山中出
銀鑛已百有餘年所鑿昔時得銀鑛得七八百斤云今
僅得二三錢云山下有金甲居家六十餘家云又道左傍僅
数十歩有一古松蟠根踞蜒四方凡　百軒實一奇木也

僻地恨少人賞俗稱源廷尉憩松其從来可考又道有
一大石俗曰辨慶硯石其旁有大杉稱笠杉近傍山中見
羽黒或權現等諸祠是等屬福嶋將入貝田有一圓山名
曰丸山是所謂伊達大木戸也黄昏入貝田又行半里許曰
落泊越河阿部屋自此我藩封地也此日終日快霽
廿九日寅時後蓐食發至犀河夜已明此道路小礫甚多
極艱難経嶝越而近犀河有河出異魚俗稱孫太郎
魚傳云小兒五疳藥其物未可考右白石嶽諸山秀乃山左右
山々如繞墻至白石則日已巳時此地長臣片倉氏所城也
人民繁夥產紙温麵及紙布葛粉等最名品云出驛有川

日白川石経宮金ヶ瀬大河原舟廻黄昏泊槻樹南部屋槻
木驛口向見一山頂上蒼松連綿風色頗雅是東海中舟
子所標的也呼曰千貫松舟廻左方有船岡山此下有長家
臣芝田氏居館道路白石河流終注安武隈川云槻木右
方有羽州山縣岐路云此日午前快霽午後大風至暮歇
晦日平明発抵岩沼途中長堤左方阿武隈水曙色甚
佳右方見千貫松風景頗雅致岩沼古内氏封地一之
街邑也至増田逢常州龍崎村長松田氏同行至中田
経長町渡河憩五家亭午後泊府下百騎街松崎氏
賜第主人不在逢嗣子某

十月朔日快晴 延書課九ツ前出宅 蔵人所ヘ罷出候て暫
閑談夕飯給 會人所へ寄ル ヨドミ橋を渡り中島町ヘ出て
赤坂高通ヘ行テ額書出文会覧シテ申ニ至持論ル物
書ヲ見て茶七ツ頃帰ル 論至終々遠藤許ヘ参り真方ニ逢
家来大槻後左衛門ニ対談し 暮方帰る
二日早朝湯ニ行 四ツ前出宅 中島町荒井ヘ行且額
額ヲ秋保真次ヘ掛合 帰ニ松井氏へ寄り暫且物語 夕
飯酒を行ひ 一関郎へ寄り 岩井氏ニ逢 暮返帰る
三日朝晴 晝ち折ニ為夜中歇 朝飯後出宅 子至小原
左衛門墓参 帰ニ来り田中久左衛門へ行 出宅 遠藤

忠兵衛へ立招キ松崎先生ニ来ル斎藤別荘ヨリ大橋川ニ
出ニ見山本町ヨリ亀島へ速山愛宕ニ至リ紅葉ヲ如深錦風色
甚佳想亭ニ至リ潔雅閑談シテ夜五ツ半頃ニ至ル
四日朝雲早朝寺町丹雲十三郎へ行同心町小嶋へ行夫ヨリ
小田原金剛院町ニ居ル十右衛門へ行五ツ半過帰ル八ツ半頃ヨリ
御宅ヨリ菜根譚四冊へ行夫ヨリ遠藤弥平へ寄ル酒ヲ行ニ
松井玉潤へ寄リ夕飯饗有リ一同居為へ枕頼ム暮過帰ル
○高麻ヨリ葉來増田甚吉来ルよし
五日朝雲冷斎藤へ葉ヲ持チ朝飯済ミ御宅増田香吉同伴
下村友孫へ行ニ頼ム夫ヨリ五番丁秋保遠山等へ行ク留守

夫ヨリ二日町へ寄ル江戸新石町西村治兵衛ニ逢フ肴町鈴田宗閑へ
行夕飯饗ニ暮方帰ル
六日朝晴早朝秋保へ行朝飯ヲ振舞帰ル丹雲へ寄リ
四ツ頃帰ル九ツ過御宅数人ニ而へ行甚兵衛市ニ御宅帰ル
斎藤へ寄リ諸物語リ夕飯ヲ振舞暮帰ル
七日早朝風呂へ行夫ヨリ小源太来ル大槻俊吉ヨリ使者ニ来ル
四ツ半頃御宅下村友孫へ行留守閑談夫ヨリ小源太へ行
葉調合ス中山左右衛門へ松崎杖面白ク存ズ赤城様見ユル
為メ寄リ一同居為へ寄ル大竹ニ逢フ同僚国吉伯ニ逢フ大
町三丁目ニ住居のよし夜半帰ル

八日快晴早朝丹堂へ年始ニ参ル昼ゟ遠藤留主ニ而拓所里
参餅饗アリ氏家雲五郎ニ逢フ酒肉有テ暮方雲潤ヘ寄リ
五ッ時帰ル物語シ帰ル小原方へ年始ニ参ル
九日朝雪早朝洗湯ニ行四ッ時千秋小原方へ行昼ゟ五
読ス昼ゟ諸葉読ス夕飯饗さる八ッ半時過帰ル夫ゟ茶留
林子早く尋留主ニ而見ヲ右勝ト云事ナシ昨日便秘
肚痛ス
十日朝雪快晴洗湯ニ行夫ゟ桑木方ゟ中月道過ヘ上
拓所里論語先生勝田幸助ヲ招ク同斉梅原長官首本
会餅其外酒食饗ス四ッ頃帰ル昨夕東都先生仙臺

ヨリ会朝立ナリシ昼年始西堂林子年来ル所也
十一日朝雪快晴早朝小原方十五日参候へ行昼九ッ頃ゟ緒殿へ
行加藤八弥留主也直ちゟ年始へ行ク小崎ニ出逢フ帰リ然ゟ
論語先生ヘ参ル読白石侏儒翁勝子等の書ヲ看ル夕飯
ニ振舞伊達保原梁川の風土毎人ニ逢フ梁川ノ人仕名万
栄次ト云フ人江都ニ住ス也
十二日快晴朝飯後斉藤同道ニテ御赤尾ヘ行昼中山方
ニ相ラ御殿而御付作ニ出拝見ス殿閣経蔵ノ雄大
宏麗等ノ所不能諸鳥ノ同様ノ門首宝橋表上ル人ゟ出
ミノ同御ノ上気木会天井ハ人ゟ付諸木迄り梅木ヲ用ユ

結搆板行の工ミなる事人ニ及ハサル所出来て作り立たるもの
なり日暮争門彫後精密にして菊桐の御門を志るもの
門前ニ唐金の大筒を置り高月ト号かざり置り厳重なり
左右ニハカシトいふる大筒丁あり其重六七百目のなり此殿閣
古ヘ古田要人祖先善請奉りしよし其後諸御役の為
なるに此の役所をかかる作りて眺望甚佳なり六月二日見
下ニ廣瀬川迂廻ニの懸崖を引廻せる所自ら琵琶の形を
なすに故ニ是をビワクビト云フ此より旋りて瑞鳳寺あるに
大年寺山見へ遥か向ふニハ海と湖渫左右塩ケ釜の山まて金
華山海上に浮かへる海岸ニ通湖々あるものハ言様なきなり

右茶所ハ居家比丘達響かふずりを始せたるらめ皇甚た絶
景なり殿宇の左右ハ東方の北の方し金塊青結所ハ東山
公の金象鰐婦なりおほしの君ト中世志の居鈴の跡なるよし
其向の高き所ハ天る甚の様し七五高の間ト云ふ此方を引返り
山裏を登しハ兵具蔵の銅作ミ向り左右ニ焔硝御蔵向ふにハ
向ふハ大澤人備道ハすなハなり山中をエウ殺し救手伝ニ御城の
表を粧の御書ト云ふなし金梅東段ニ至り黒澤古仲中澤
左二切中山ハ小府殿の東北中山備前守殿ニ罷出まて話
山公の時召寄るを云ふ神社召置の跡おかしの見置を拝ま
なるハ百石壇金所ニ往て海ウハ内二の首ニ至て大年を通ハて中居にし

町を発し帰る途食を振舞ふ水田村に着く夜に入り帰る
十三日晴 深更より西朝墨飯塚小澤方へ行き金を無沙汰
致す事せぬ也 夫より鹿又田四丁へ行 松田方へ参り茶子金受 田中
久左衛門へ立寄り金受取 七ハ小澤方より手紙を以て直ちに来る
松井へ寄り夕飯を振舞ふ 暮方帰る
十四日快晴 早朝秋保へ行き酒やら何やら出 朝飯を振舞ひ
然し小澤方へ寄り四ツ時帰る 跡の五郎兵衛中新字を左衛門へ
夜分に至りて即来る 夕方小澤方へ快晴を以て何も帰来る
廿五日しかし 帰来る 廿五日のつもり 廿五十文来る
十五日晴 夜中より雨 早朝秋保六村へ参り 手紙を以て 出立

行き加藤ハ留守にて金受取り五郎兵衛秋保村方へ倅
を以て下村本陣へ寄り夜分桐油を買 小嶋へ手紙を以て夕方秋保へ
直ちに帰る 雨にて暮に来る
十六日晴 夜中雨 今朝霧雨 早朝小嶋へ人を以て頼み来る甚だ
帰り返書来る 四ツ半頃思立ち宮へ参詣 町を出立
三郎湯至名取御用名取湯至と云ふ屋根かへにより
夫より行き左右に寺あり末松山あるべしと行く事二里余
よって宮市と云ふ清水の茶亭に休息 湯を調え
此所を出て川より宮市川と云ふ橋を川中に渡りて廻る
夫より行き年又数百寺ありて 壺碑 十二丁 二十四丁と云ふ

碑あり名のみ高き所ニ尋ぬ其の和歌見事を即坪碑なり
行て見るに雨覆を掛ける者の多く有る民家ニ立寄り雨覆一枚を求め
又帰りへ向て行且車数十台民家ニ並べ筆頭ニ在り雨覆り
畑の上を車ニ乗り行且車来るニ出合ひして塩竈の宮へ至
塩竈社の森林見ゆる七ツ時出て塩竈町へ着日光新たて出
郭也勘助と云ふ者ニ許可を得る社前を詣て右方ニ別宮あり
詣ニあり社前石段の燈籠あり右方別当の家へあがる坂を上り
右ニ神楽アリ和泉三郎の献する文治年号の銅燈籠あり
坂を下り風呂へ行旅店ニ帰る夕飯仕舞て好き二番人来り
坂を借て出の老人来りて小曲を謡ひ坂を借て夜更ニ返り

閨ニ寝り強く風吹きて暮方歌唱中日清朝樹写よう為る風々
甚だ佳
十七日朝大雲早朝酒肴を行き見渡しを為し塩竈の宮の社ニ
社段昆布海藻等を御馳走あり風呂ニ入り漸く四ツ時朝飯仕舞て
発足し好川段へ送る此の民家へ寄り雨を待ち外ニ二三尺
調へ金平と又勘七暮方車の涌出で漸く珠の外草叶水ル
食事仕舞て寝みつく
十八日朝大雲快晴早朝松保中塚へ人を立て四ツ時過ぎ幸寛へ行き
中塚へ出迎へ今日御帯刀様の仕度の内能権守の諸士を始として
其勤の流を作上田ニ大手迄来る行縫早々御帰り候由為し

回て歸路 猪田へ寄り中澤方へ寄り夕飯を振舞
はれ 御侍衆行て額書本読 五ツ比帰宅
十九日 朝栗快晴 昨 岸西朝飯後日向殿へ行 西より先を私
へ寄り 帰とて振舞 はれ 松井へ寄り 斎藤へ寄る 七ツ半過帰る
越中斎藤同行して寄セへ行き 役屋席を出して国分町出
在面四ツ前帰る 独得方下書取寄る
廿日 朝食早朝浅野月代に行 昼朝飯後穀人殿へ行 昼
平吉へ通 様会人殿へ寄り不逢 来る小十郎栗田主殿
寄り不在 七ツ時帰る 恵美煙草餅取り 差多く済 夜へ行
出作着帖話お持参

廿一日 朝栗快晴 衆旅にて朝飯後 弁出潤へ行き物語りて
屋寺を旅に帰り 種子煙餅取りに七ツ半過帰る
廿二日 昨経中分西七ツ時分 年男へ行き 皆様を見 四ツ時を開
銭良山公の会戦より来春の勝利の銭取り 桜井平右来り
会七進 他役人寄り同行して大町三丁目を来る 関屋大槻出
九ツ前帰る 華弁同邪
廿三日 朝雨微風 早朝浅野へ行 九ツ比方を旅に行 出作に逢ふ
また不小沢方へ行 昼不在寄り帰る 暮方寄せへ行 東藤同
行して人山人海出く帰る
廿四日 大栗快晴に西より朝飯後 殿人殿へ行 芸妓屋へ逢ふ

玄関ハ暮ノ吉村与兵衛して小林方町ヨリ御出ヲ御訪フ夜中
斎藤ハ御ヘ餅ヲ振舞四條御ヲ御入ノ日ノ事也
廿五日所在ハ四ツ時ヨリ大雪初テ也今朝斎藤ヘ参リニ御用朝
飯後小濱方ヘ行其より直ヲ斎藤ヘ御用ノ御振舞ニ去潤ハ御用
食飯ヲ振舞有暮過夜高藤より議国府ハ御用
御懇今日暮ニ其相食ヲ喫シ四ツ時御用外殿より下ル
夫より直書中也
廿六日朝晴朝ヨリ西四ツ比母御用外東ヘ殿ヘ行ヲ子ニ其
其七ツ時暮書状西通来書面ル事ニ候ヘ暮ル
夫より所ヲ斎藤石井ヘ暮ノ子石井大弁ヘ暮ノ小濱方ヘ

暮ニ西通来ニ暮方ゟ海事ク暮ノ主振舞ニ行夕方帰
来者ニて不来新井彦七ニ逢四ツ半比御
廿七日朝晴早朝泥沼ヘ行ヨ人ル迄溝よて九ツ比ゟ来宅
ハ金七小田ヘハツ半過ル者新町ヘ暮迄暮色伊豆ヘ立寄
ニ泉ニ至而泥溝ヲ出達ゟ関東大雅鐵太作不来
廿八日晴朝七ツ時過ル発し四ツ過ヨ吉岡ハ暮之其内ヘ暮ル
太作ヲ従所夜暮方先ヲ来ニ来ヲ而朝後ヲ振舞致田也
青木勝ハ病状ヲ談じ先ノ句ニ安部思ヲ結事常陸謝儀
ヲ始玉屋宴ヲ夜月席ト立ヨ只し廿ハ比主山坂ヲ撃ニ三
本木ハ暮ノ坂東風気進中比ニ至ル主暮来客主之去致帰

出ル下甚雲縁ニ付ト云ゝ西方豚渕三本木ゟ古町坂也と
申地此所ニ有田畑荒畫場也ト云ゝ廿三ケ所ニ有之
加之候ト云ゝ由ニ御座候
廿九日朝大雲寺ゟ快晴七ツ時発足箕輪寺堂古町坂也
深遠全然を経て石壁ゟ善通一關届請役人出勤
出ル所ニ而途中諸子来ル

晦日十七日晴七ツ時通東原川渡と一関を発足いたし候地震
有之候晴曾の由猿引の諸君大勢来り晴ニ而尤峠黒雲巻生
善鍛引之事ニ宮籔猪之良伊田峠善事を見つけ之を送る
右壁之良計徳ト舟民次長次猪之助来り清左衛門来り碧峠
別れて告く全然深遠宮堂箕輪を経て善通之撫蔵
を出し下着歩行ニ振論之着加屋居ニ御座候宮ゟ雲一字ニ之
深宮堂ゟハ雲荒し出作日律宗如雲籔仙甚と候とや
十八日晴ニ而清水を発し着る古町三本木経て善通之
吉田子兄弟一宗茶ゟ許ゟ着御座候お由ゟ大積庫穀田や十
三塔本雄作ホ方を出ニ針醫と称古下村右孫門人の由

夜中まで段々夜話ありて帰る 寄年より雪と村椛こく
庖厨に至る玄米弁当新井寿七并来るいはく子息る
のち吉松崎へ参る持参ニ而帰る
廿二日快晴四ツ時城下を発し大森来云町を経て
下来る日照寺並泥沢大方雪甚多く應し田中増田
を経て暮れ岩沼駅玄米井出宅に着く新町にて此驛
子息小沢生の御用ニて泊出也泊る新町に五ツ前話し
帰りて始め日入ニ此宿へ来る今日遠中にて子ある松本氏より
本日より下りて仙台十一日東都を発し一日より
廿三日朝岩沼を発し到る寄はしき藤崎の駅を

廿日雪ふり
十九日五つ時発し新町七畠を経て暮過ぎ中屋にて所
遠藤へ着早速同心町石坂町へ行里四ツ時帰る拙者大雁
佛公勝
廿日快晴九つ比より早出吉田方へ行里夜中位まで居て帰り
針医を頼む去润一読を請ひ茶を菓子一閑を発し至
子手紙と雪荷を遣す帰る四ツ時より早朝小沢生来話す
東の僧
廿一日快晴早朝同心町石坂町民平町吉方へ行里四ツ時帰る○
昨日松崎より七ツ過し来書中ニ遠藤より始所にてお供に堀虎

過て是より阿武隈川の下流に沿ひて菅沼のといふる
梅の手沼里といふ此川城場に深を望り舟伴白川宿を
経て此に至る川を渉り一里余にして亘理に至る伊達郡
郡の舌録大ら口の口の光に里程町驛中脈る無楽野ヶ括木
を経て山下に至る房郡鐘に小坂を攀ち坂下に至る此の
方は舟に小高き山もありては一里に多くつゞきて皆濱辺
なり潮吉堂に昨日出て坐りして是よりは今の所て
故なりといふ又は岩場は西方の舟を見ゆ泥津之坂本は
久保藏人在之名石といふ七里半にして菅谷新地へ宿
品川也加ゆる許に舎るつるしやといふ詰出を去る事僅に十

四丁といふ
此朝晴風吹き空東方海と隣見風さへ甚佳浜に坐渡
垣本見るに五つ石駒ヶ岳に至り御所の判然験なる
御境目役人出切る納ム方慶経通行を門の関
已望坂方よりといふをし此地大音旺富西大山松嶋地
なりといふ名石といふ関門を有十余りにして五相至り足仕茂
木曽の境なり黒木に至る是より中村の相殿水屋にある
の宮義之の地なり其驛に四末角して中村に至る宿の城
府一方の部多く也府を離れて川をとり足しを渉り小驛あり
是しを見て鹿島に至る此方多くは平境の地左方の田畝あり

羨ひ葛を東の所接けり許多暮る
此丘藤並途中恵並永暁暁方原所を発足驛を
出て京迄り所謂赤る牧なり中央注還の並沿たる堤原
皆牧なりる駒多有余もといふ青草の芳多く訪る今日は左
方に備ふ四五疋を見る此原方は一里左は十里に周圍は
七里といふ五六中の車篇車あり厨立の人申由を聞と
呼ぶを返ヒて二里ほかるの驛ひそえてる暫見社へ返し
てるを得そといふ君は右方の小高き岳に陣を定るといふ
まゝ小高新山を経て善逢熊川に至り接けり許多
暮る此途中海上或は隠れ或は見れ風色佳新山高し

此営ありて今大沢ヶ谷を経せといふ熊川とある鎮台十
四里といふ至て荒亡の地多し
廿六日晴熊川を発し此方海岸に見へ風色佳絶国子也
る是より鎮中井清左衛門といふ所といふ余縁ぬ驛也
直隠大営ありて兼清来ハなり是驛を発て先年風雨ニハ
大樹を吹倒し並河ハ皇方ハなる所多く至て甚多露し
あり、海岸多ニ見へ風景甚よし来りよ度坐を経て
名里清き浪ある路一里風色甚よし右は宮下絶壁
打く年数あるなるして海岸に至てる山高くあり地形岩十八あり
塩浜を堺所にありて皆砂を踏て此里来りてを右へ曲りて

山多く所々嶮難峻嶺多く渡く所ゝある駅の東所
裏ニ城あり是ゟ城下を経て山坂を攀て五ッ頃ハ
居城ゟ雪降る今日高田の人足ゝ易をこれい
廿七日晴暁四ッ時を発し午ハ至る一部宿あり安藝
對す本社なりより坂橋高ニ見事所幅廣し十二丁より
ト云ふ出口ニ門あり東の出口柏橋より西門ト云ふ
小出口鎌田川より来る湯本此所家毎に湯より懸り茶
ゟ許ニ温泉ニ浴す甚だ快し辰半ニ此駅発大宿薬来
来此迄此駅の三里より ト云ふ所発れ中宿に所温
泉社あり新田へ行此所渡辺所二ッ半到る宿所あり湯本

是れより代田所ト云ふ足ゟ上田への途中宿の東に
あり湯本谷ト云ふ小駅西ハ新ニ殺本地此所ニ家
ト云ふ所より本毎陣正殿本地此也鎮守より善光寺上
田町仙道也ゟ許ニ宿る君居遊ぶ楽と力ひし由あり
此駅ゟ関田を半頃ト云ふ
廿八日晴朝六ッ比上田を発し五所半にして川より御
め川ト云ふ一里ニして関田に至る渡す深さ切り来
来至半ニして所謂名古関あり山坂数万寺の内中
眺望あり甚通し長さ十六七丈幅二丈程る中五六丈
旅の所未見にて傑き事を湛へ樹木生ゝ茂り是ゟ

湖上眺望しく沖見ゆくあるまゝ望渡此る松原を左右ハ
湖東橋辺舟に浮て風色甚わり沖見ゆく十日市望
と云所を左る平沢くの辺より来るを下とし一方の要港
なり桐原鎮なる望渡の水内郷鎮荒川の岩窟山坂より
まゝ善光寺街道小木曽驛甚工よく諏訪へ繋る此途中
川扇木曽との小邑あり
宋本鉄嶂峠小木曽を発し両川に至れ此る山坂あり
湖上見ゆる是より下諏訪まで森山の側刈方名に花岡諏訪峯
見へ左右一面の平原の藤林湖を見る事甚るなし
二里を余るとし是より大橋に至る所々の原あり八丁流

東照、桑川と云所あり下とし是より国府の跡ある所跡
あり此所に伊那山塊の境望早山に接するとし
以西なし十日に理大明神の社あり大橋より石神への写
桑川と云川あり府沢田井と云ふ東より大橋と十六
接り奈良井を田く別れをありて石神より洗馬に渡る此驛より鹿
為るく望とし洗馬より桔梗川此は田原と云ふ所の本あり
桔梗川又南へと次ぐ許に会る善光寺之当る八十六
境を東に汲の驛を見て大庭之
朧月頃日洗峠朝大雲峰桔梗川を発し東十余里
桔梗川渡し梓まるに此川船越塊方の中川の下流

手繰舟ニ而水底ニ通る長サ三丁ニ近し川幅廣さ一都
會なり橋を渡り峯の頭れハ方ニ而堺見ゆる是と
橋二ツ是而而堀橋よりで又入る其ニ遊津衣裳小橋
を経て此會へ着此日其ニ遣れる合ニ近き生路あまき
此會邑中泊舍ニ至る新ニ會る
二日晴朝早発し行幸く斯是より寺山館所々
焉内ニ福浮是より村中ハ松平横丁ニ而南北一部會之
所の出船ハ女男川より船ニ中里同郡下ニ至る會の本
を経て木浦へ入る民居壁並ニ一とまる所之坂出へ十
八里江戸へ上り日新着る遣て中村問屋へ泊る去年領地之

三日朝早晴発し茂川中文若柴を経て多くの慕家
者問屋坊喜兵衛へ泊る此所之今日ハ平壌の地を
此泥津喜川中ハ山ハ中ノ近来南北之
四日暑五ツ時を細田而出発晴快発足行く来加十家
あして舟渡る二艘なり加類の下流之総掛へ一里
中籠浮岸沿ニ是へ総掛をあて小舍へ二里相
出下る所よ二十八丁の高壇ニ其後ニ而所渡小舍拾なり
枝ハ七八里を至りト云ふ小舍路ニ降居始りて今十日ニ
安よ高さ也るとこふ比方を此泥津小舍よ松々へ
去里二十九丁を其ニ池あき総ニ諸岸見ゆる八ツ時

右以驛森田平七藏本許可書寫畢爲二百之
五日朝晴

大槻文庫藏